

日蓮大聖人御書全集

しよほうじつそろうしよ

諸法実相抄

新版
1788
〜
1793

諸法実相抄

しよほうじつそうしよ

ぶんえい ねん がつ にち さい さいれんぼう
文永10年(73) 5月17日 52歳 最蓮房

にちれん しる
日蓮これを記す。

と い ほけきよう だいいち ほうべんぼん い しよほうじつそう
問うて云わく、法華經の第一の方便品に云わく「諸法実相

ないしほんまつくきようとう

うんぬん

きようもん

こころ

乃至本末究竟等」云々。この經文の意いかん。

こた

い

しもじごく

かみぶつかい

じっかい

えしよ

答えて云わく、下地獄より上仏界までの十界の依正の

とうたい

いっぽう

残

みようほうれんげきよ

相

当体、ことごとく一法ものこさず妙法蓮華經のすがたなり

きようもん

という經文なり。

えほう

かなら

しよほうじゅう

しやく

い

依報あるならば、必ず正報住すべし。釈に云わく

えほう しょうほう つね みようきよう の とううんぬん じつそう

「依報・正報、常に妙経を宣ぶ」等云々。また云わく「実相

かなら しょうほう かなら じゆうによ かなら じっかい じっかい

は必ず諸法、諸法は必ず十如、十如は必ず十界、十界

かなら しんど うんぬん い あび えしょう まった ごくしょう

は必ず身土」云々。また云わく「阿鼻の依正は全く極聖

じしん しょ びる しんど ぼんげ いちねん こ うんぬん

の自心に処し、毘盧の身土は凡下の一念を逾えず」云々。こ

しやくぎふんみよう たれ ぎもう しょう

これらの積義分明なり。誰か疑網を生ぜんや。

ほうかい 相 みようほうれんげきよう ごじ 変

されば、法界のすがた、妙法蓮華経の五字にかわること

しゃか たほう にぶつ みようほうとう ごじ ゆう

なし。釈迦・多宝の二仏というも、妙法等の五字より用の

りやく ほどこ たも とき じそう にぶつ あらわ ほうとう なか

利益を施し給う時、事相に二仏と顕れて、宝塔の中にし

額 あ たも とう ほうもん にちれん のぞ

てうなずき合い給う。かくのごとき等の法門、日蓮を除い

ては申し出だす人、一人もあるべからず。天台・妙楽・伝教

等は、心には知り給えども、言に出だし給うまではなし、

胸の中にしてくらし給えり。それも道理なり。付嘱なきが故

に、時のいまだいたらざる故に、仏の久遠の弟子にあらざ

る故に。地涌の菩薩の中の上首唱導、上行・無辺行等の

菩薩より外は、末法の始めの五百年に出現して、法体の

妙法蓮華経の五字を弘め給うのみならず、宝塔の中の二仏

並座の儀式を作り顕すべき人なし。これ即ち本門寿量品

の事の一念三千の法門なるが故なり。

されば、釈迦・多宝の二仏というも用の仏なり。

みようほうれんげきよう

ほんぶつ

おわ

そうち

きよう

い

妙法蓮華経こそ本仏にては御座しまし候え。経に云わく

によらい

ひみつ

じんつう

ちから

によらい

ひみつ

たい

「如来の秘密・神通の力」、これなり。「如来の秘密」は体の

さんじん

ほんぶつ

じんつう

ちから

ゆう

さんじん

しゃくぶつ

三身にして本仏なり、「神通の力」は用の三身にして迹仏ぞ

ほんぶ

たい

さんじん

ほんぶつ

ほとけ

ゆう

さんじん

かし。凡夫は体の三身にして本仏ぞかし、仏は用の三身に

しゃくぶつ

しゃかぶつ

われ

しゅじよう

して迹仏なり。しかれば、釈迦仏は我ら衆生のためには

しゅ

し

しん

さんとく

そな

たも

おも

そうち

主・師・親の三徳を備え給うと思いに、さにては候わず、

かえ

ほとけ

さんとく

被

たてまつ

ほんぶ

ゆえ

返つて仏に三徳をかぶらせ奉るは凡夫なり。その故は、

によらい

てんだい

しゃく

によらい

じつぼうさんぜ

しよぶつ

如来というは、天台の釈に「如来とは、十方三世の諸仏、

にぎふつ さんぶつ ほんぶつ しやくぶつ じうじう

ほん たま

二仏、三仏、本仏・迹仏の通号なり」と判じ給えり。この

しやく ほんぶつ ほんぶ じやくぶつ ほとけ

釈に「本仏」というは凡夫なり、「迹仏」というは仏な

めいご ぶどう しよう ぶつこと

り。しかれども、迷悟の不同にして生・仏異なるによつて

くたいくよう さんじん しめじよう 知

俱体俱用の三身ということをば衆生しらざるなり。

しよほう じっかい あ じっそう と そうら

さてこそ、諸法と十界を挙げて実相とは説かれて候え。

じっそう みようほうれんげきよう いみよう しよほう みようほうれんげきよう

実相というは、妙法蓮華経の異名なり。諸法は妙法蓮華経

じごく じごく 相 み じつ すがた

ということなり。地獄は地獄のすがたを見せたるが実の相

がき へん じごく じつ ほとけ ほとけ

なり。餓鬼と変ぜば、地獄の実のすがたにはあらず。仏は仏

ほんぶ ほんぶ ばんぼう どうたい

のすがた、凡夫は凡夫のすがた、万法の当体のすがたが

みようほうれんげきよう とうたい

しよほうじつそう

もう

妙法蓮華經の当体なりということ、諸法実相とは申すな

てんだい い

じつそう

じんり

ほんぬ

みようほうれんげきよう

うんぬん

り。天台云わく「実相の深理、本有の妙法蓮華經」云々。

しゃく ころ

じつそう

みようごん

しゃくもん

ぬし

ほんぬ

この釈の意は、実相の名言は迹門に主づけ、本有の

みようほうれんげきよう

ほんもん

かみ

ほうもん

しゃく

よ

妙法蓮華經というは、本門の上の法門なり。この釈、能く

よ しんちゆう あん

たま

そうら

能く心中に案じさせ給え候え。

にちれん

まつほう

う

じようぎようぼさつ

ひろ

たも

日蓮、末法に生まれて、上行菩薩の弘め給うべきところ

みようほう

さきだ

弘

作

顕

たも

の妙法を先立ってほぼひろめ、つくりあらわし給うべき

ほんもんじゆりようほん

こぶつ

しゃかぶつ

しゃくもんほうとうほん

ときゆじゆつ

たも

本門寿量品の古仏たる釈迦仏、迹門宝塔品の時涌出し給う

たほうぶつ

ゆじゆつぽん

ときしゆつげん

たも

じゆ

ぼさつとう

つく

あらわ

多宝仏、涌出品の時出現し給う地涌の菩薩等をまず作り顕

たてまつ

よ ぶんぎい

にちれん

し奉ること、予が分齊にはいみじきことなり。日蓮をこそ

憎 ないしよう

およ

にちれん

にくむとも、内証にはいかが及ばん。されば、かかる日蓮を

しま おんる つみ むりようこう

消

おほ

この島まで遠流しける罪、無量劫にもきえぬべしとも覚え

ひゆほん い つみ と

こう きわ

つ

ず。譬喩品に云わく「もしその罪を説かば、劫を窮むとも尽

にちれん くよう

にちれん でし

きじ」とは、これなり。また日蓮を供養し、また日蓮が弟子

だんな たも

くどく ほとけ ちえ

量

檀那となり給うこと、その功德をば仏の智慧にてもはかり

つ たも

きよう い ほとけ ちえ

たしよう

尽くし給うべからず。経に云わく「仏の智慧をもつて多少

ちゆうりよう

ほとり え い

を籌量すとも、その辺を得じ」と云えり。

じゆ ぼさつ 先 駆

にちれんいちにん

じゆ ぼさつ かず

地涌の菩薩のさきがけ日蓮一人なり。地涌の菩薩の数にも

や入りなまし。もし日蓮、地涌の菩薩の数に入らば、あに、

にちれん でしだんな じゆ るるい

きよう い よ

日蓮が弟子檀那、地涌の流類にあらずや。経に云わく「能く

ひとり

ほけきよう ないしいつく と

まさ

ひそかに一人のためにも、法華経の乃至一句を説かば、当に

し ひと すなわ によらい つか

によらい つか

知るべし、この人は則ち如来の使いにして、如来に遣わさ

によらい

じ ぎよう

べつじん

と たも

れて、如来の事を行ず」。あに別人のことを説き給うならん

や。

されば、余りに人の我をほむる時は、いかようにもなりた

こころ しゅつたい

そうろう

ことば

起

き意の出来し候なり。これ、ほむるところの言よりおこ

そうろう

まつぼう う

ほけきよう ひろ

ぎようじや

さんるい

り候ぞかし。末法に生まれて法華経を弘めん行者は、三類

の敵人有つて流罪・死罪に及ばん。しかれども、たえて弘め

てきじん あ るぞい しぎい およ 堪 ひろ

ん者をば、衣をもつて釈迦仏おい給うべきぞ、諸天は供養

もの ころも しゃかぶつ 覆 たも しまてん くよう

をいたすべきぞ、かたにかけせなかにおうべきぞ、大善根の

肩 懸 背 中 負 だいぜんこん

者にてあるぞ、一切衆生のためには大導師にてあるべしと、

しゃかぶつ たほうぶつ じっぽう もろもろ ぶつぼさつ てんじんしちだいちじんごだい

釈迦仏・多宝仏・十方の諸の仏菩薩・天神七代地神五代の

かみがみ きしもじん じゅうらせつによ しだいてんのう ぼんてん たいしやく えんま

神々・鬼子母神・十羅刹女・四大天王・梵天・帝釈・閻魔

ほうおう すいじん ふうじん さんじん かいじん だいにちによらい ふげん もんじゆ にちがつ

法王・水神・風神・山神・海神・大日如来・普賢・文殊・日月

とう しょそん 褒 たてまつ むりよう だいなん

等の諸尊たちにほめられ奉るあいだ、無量の大難をも

かんにん そうろう かんみ ぞん 顧

堪忍して候なり。ほめられぬれば我が身の損ずるをもかえ

謗

とき

わみ

破

知

りみず、そしられぬる時はまた我が身のやぶるるをもしらず

振舞

ぼんぷ 事業

ふるまうことは、凡夫のことわざなり。

こんど しんじん

致

ほけきよう

ぎようじや

通

いかにも、今度、信心をいたして、法華經の行者にてとお

にちれん

いちもん

たも

にちれん

どうい

り、日蓮が一門となりとおし給うべし。日蓮と同意ならば

じゆ ぼさつ

じゆ ぼさつ

定

しやくそんくおん

地涌の菩薩たらんか。地涌の菩薩にさだまりなば、釈尊久遠

でし

うたが

きよう

い

われ くおん

の弟子たること、あに疑わんや。經に云わく「我は久遠よ

このかた

しゆ きようけ

まっぼう

り来、これらの衆を教化せり」とは、これなり。末法に

みようほうれんげきよう

ごじ

ひろ

もの

なんによ

嫌

して妙法蓮華經の五字を弘めん者は、男女はきらうべから

みなじゆ

ぼさつ

しゆつげん

とな

だいもく

ず、皆地涌の菩薩の出現にあらずんば唱えがたき題目なり。

にちれんいちにん

なんみようほうれんげきよう

とな

ににん

さんにん

日蓮一人はじめは南無妙法蓮華經と唱えしが、二人・三人・

ひやくにん

しだい

とな

伝

みらい

百人と次第に唱えつたうるなり。未来もまたしかるべし。

じゆ

ぎ

こうせんるふ

とき

これ、あに地涌の義にあらずや。あまつさえ、広宣流布の時

にほんいちどう

なんみようほうれんげきよう

とな

だいち

まと

は、日本一同に南無妙法蓮華經と唱えんことは、大地を的と

するなるべし。

ほけきよう

な

立

み

任

たも

ともかくも法華經に名をたて身をまかせ給うべし。

しゃかぶつ

たほうぶつ

じつぼう

もろもろ

ぶつぼさつ

こくう

にぶつ

領

釈迦仏・多宝仏・十方の諸の仏菩薩、虚空にして二仏うなず

あ

さだ

たま

べち

き合い、定めさせ給いしは別のことにはあらず。ただひとえ

まつぼう

りようぼうくじゆう

ゆえ

すで

たほうぶつ

はんざ

わ

に末法の令法久住の故なり。既に、多宝仏は半座を分かち

しやかによらい たてまつ たま とき みようほうれんげきよう はた 差 あらわ

て釈迦如来に 奉り給いし時、妙法蓮華經の旛をさし 顯

しやか たほう にぶつ たいしよう 定 たま

し、釈迦・多宝の二仏、大将としてさだめ給いしこと、あ

偽 われ しゅじよう ほとけ

にいつわりなるべきや。しかしながら我ら衆生を仏にな

ごだんごろう

さんとの御談合なり。

にちれん ぎ じゆう そうち きようもん みそうろう

日蓮はその座には住し候わねども、經文を見候にす

曇 ぎ

こしもくもりなし。またその座にもやありけん。凡夫なれば

かこ 知 げんざい み ほけきよう ぎようじや ぼんぷ みらい

過去をしらず。現在は見えて法華經の行者なり。また未来は

けつじよう どうけいどうじよう かこ すい

決定として当詣道場なるべし。過去をもこれをもつて推す

こくうえ さんぜかくべつ

るに、虚空会にもやありつらん。三世各別あるべからず。

かくのごとく思いつづけて候えば、流人なれども喜悅おも 続 そつら るにん きえつ

はかりなし。うれしきにもなみだ、つらきにもなみだなり。計 無 嬉 涙 辛

涙は善悪に通ずるものなり。彼の千人の阿羅漢、仏のことなみだ ぜんあく つう か せん にん あらかん ほとけ

を思いいでて涙をながし、ながしながら文殊師利菩薩はおも 出 なみだ 流 もんじゆしりぼさつ

妙法蓮華経と唱えさせ給えば、千人の阿羅漢の中のみようほうれんげきよう とな たま せん にん あらかん なか

阿難尊者は、なきながら「如是我聞」(かくのごときを我聞きあなんそんじや 泣 によぜがもん われき

き)と答え給う。余の九百九十九人は、なくなみだをこた たも よ きゆうひやくきゆうじゆうきゆうにん

硯の水として、また「如是我聞」の上に「妙法蓮華経」とすずり みず によぜがもん うえ みようほうれんげきよう

かきつけしなり。今、日蓮もかくのごとし。かかる身となる書 付 いま にちれん み

も、妙法蓮華経の五字七字を弘むる故なり。釈迦仏・多宝仏、
みらいにほんこく 留置 とも

未来日本国の一切衆生のためにとどめおき給うところの
みようほうれんげきよう 留置 とも

妙法蓮華経なりと、かくのごとく我も聞きし故ぞかし。
みらい じようぶつ おも

現在の大難を思いつづくるにもなみだ、未来の成仏を思
げんざい だいなん おも 続 涙 塞 敢 涙 けい じようぶつ おも

つて喜ぶにもなみだせきあえず。鳥と虫とはなけども
よろこ 涙 塞 敢 とり むし 鳴

なみだおちず。日蓮はなかねどもなみだひまなし。このなみ
涙 落 にちれん 泣 隙

だ世間のことにはあらず。ただひとえに法華経の故なり。も
せけん ほけきよう ゆえ

ししからば甘露のなみだとも云いつべし。涅槃経には、
かんろ ねはんぎよう

父母・兄弟・妻子・眷属にわかれて流すところの涙は四大海
ふぼ きようだい さいし けんぞく 別 なが なみだ しだいかい

みず

多

ぶつぽう

いつてき

溢

の水よりもおおしといえども、仏法のためには一滴をもこぼ

み

ほけきよう

ぎようじや

かこ

しゆくじゆう

さずと見えたり。法華經の行者となることは過去の宿習

おな

そうもく

ほとけ

作

しゆくえん

なり。同じ草木なれども仏とつくらるるは宿縁なるべし。

ほとけ

ごんぶつ

しゆくごう

仏なりとも権仏となるは、また宿業なるべし。

ふみ

にちれん

だいじ

ほうもん

書

そうろう

この文には日蓮が大事の法門どもかきて候ぞ、よくよ

み 解

たま

ごころう

たも

く見ほどこせ給え、意得させ給うべし。

いちえんぶだいいち

ごほんぞん

しん

たま

相

構

一閻浮提第一の御本尊を信じさせ給え。あいかまえて、あ

しんじん

強

そうら

さんぶつ

しゆく

被

たも

いかまえて、信心つよく候いて、三仏の守護をこうむらせ給

うべし。

ぎようがく

にどう

励

そうろう

ぎようがく絶

ぶつぼう

行学の二道をはげみ候べし。行学たえなば仏法はある

われ

ひと

きようけそうら

ぎようがく

しんじん

べからず。我もいたし、人をも教化候え。行学は信心より

起

そうろう

ちから

いちもんいつく

語

たも

おこるべく候。力あらば一文一句なりともかたらせ給う

なんみようほうれんげきよう

なんみようほうれんげきよう

きようきようきんげん

べし。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。恐々謹言。

ごがつじゅうしちにち

にちれん

かおう

五月十七日

日蓮

花押

お

もう

そうろう

にちれん

そうじよう

ほうもんとう

さきざき書

まい

追つて申し候。日蓮が相承の法門等、前々かき進ら

そうら

ふみ

だいじ

こと

記

進

せ候いき。ことにこの文には大事の事どもしるしてまいら

そうろう

ふしぎ

けいやく

ろくまんごうじゃ

じようしゆ

じようぎよう

せ候ぞ。不思議なる契約なるか。六万恒沙の上首・上行

とう

しぼさつ

へんげ

定

故

そう

にちれん

み

等の四菩薩の変化か。さだめてゆえあらん。総じて日蓮が身

あ

ほうもん 渡

そうろう

にちれん

に当たつての法門わたしまいらせ候ぞ。日蓮、もしや

ろくまんごうじや

じゆ

ぼさつ

けんぞく

六万恒沙の地涌の菩薩の眷属にもやあるらん。

なんみようほうれんげきよう

とな

にほんこく

なんによ

導

南無妙法蓮華経と唱えて、日本国の男女をみちびかんと

思

きよう

い

いち

じようぎよう

な

ないしししやうどう

おもえばなり。経に云わく「二に上行と名づく乃至唱導

し

と

そうら

しゆくえん

追

の師なり」とは説かれ候わぬか。まことに宿縁のおうと

よ でし

たも

ふみ

相

構

ひ

たま

ころ、予が弟子となり給う。この文あいかまえて秘し給え。

にちれん

こしよう

ほうもんとう書

付

そうろう

止

お

日蓮が己証の法門等かきつけて候ぞ。とどめ畢わんぬ。

さいれんぼうごへんじ

最蓮房御返事

